

## チワン語：その紹介と漢語の影響

岩佐, 昌璋  
九州大学教養部：助教授

<https://doi.org/10.15017/6796135>

---

出版情報：言語科学. 17, pp.19-30, 1982-03-20. The Group of Linguistic Studies College of General Education, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# チワン語

## －その紹介と漢語の影響－

岩 佐 昌 璋

小稿は漢語文化圏成立の研究の一環として、漢語が隣接する少数民族諸言語に対しどのような影響を与えたかを、チワン語を例にしてみようとするものである。

少数民族語と漢語との接触にかんする研究は、漢語そのものの成立や構造を考えるうえでも重要であるが、現地調査の困難、資料の不足等もあって従来ほとんどなされてこなかった。筆者はチワン語については知識も乏しく、実用能力は皆無、ただ音声記号を頼りにそれが話される際の音声を想像するだけといった程度の素人にすぎない。小稿も漢語文献資料にもとづいたものであり、筆者自身の知見はふくまれていない。従ってこれは研究論文などではなく、一種の編訳ないし紹介にすぎないのだが、チワン語（に限らず中国の少数民族語の大多数がそうであるが）に関してはこの程度の紹介すらまだ皆無だというのがわが国の実状であってみれば、このようなものでも今後の研究のための捨て石の一つにでもなるかもしれないと思い、あえて発表することにした。(1)

### 1. チワン族

#### 1.1 チワン族の呼称

中国の疆域内には「民族」として認められているものが、現在のところ漢民族を除いて55民族存在する。「現在のところ」といったのは、目下この55民族以外にチベットのトン人(僜人)、雲南のクツォン人(苦聰人)など十数の族称単位について、単一の民族として認知するかどうかの調査が進められており(2)（さらに最近20の族称単位が認知の要求を出しているという）(3)、この数が将来ふえることは確実だからである。この55の少数民族のうち、最大の人口を有するのが、これから紹介しようとするチワン族(壮族)なのである。

チワン族は後に述べるように広西、雲南を中心とする中国西南の広い地域に分布するが、その族称は各地によって異なる。

例えば、広西中部から西部にかけての広い地域に住む人々は  $pou^4 tsu:n^6$  または  $pou^4 u:n^6$  と自称し( $pou^4$  はチワン語で「人」をさす量詞)、北部と西北部および雲南省文山の北部では  $pu^4 jai^4$ （これはブイ族の自称と同じである）と自称し、西部と文山の南に住む人々は  $pu^4 nonpɯ^2$  と自称するといったぐあいである。このほか、 $pu^6 dai^2$ ,  $pho^6 thai^2$ ,  $kwn^2 tho^3$ ,  $pu^4 to^3$ ,  $pun^4 main$ ,  $pou^4 bain^3$ ,  $pou^4 lau^2$   $pou^4 u:n^6$  など(4)、全部あげていけば20種前後にもなるという(5)。

解放後、チワン族居住区では1952年桂西チワン族自治区をうちたて、56年にはこれを自治州に改めた。そして58年3月現在の広西チワン族自治区が誕生した。こうした民族自治確立の過程でチワン族の統一した族称を定める必要が生まれ、協議を重ねた結果  $pou^4\epsilon u:\eta^6$  が統一の族称と決まった<sup>(6)</sup>。その原義は「田を耕す人」の意味だろうという<sup>(7)</sup>。

チワン族の自称を表わす漢字としては、古く宋代に「撞(現代漢語音では [tʂuɑŋ<sup>4</sup>])」が使われ、明代になると扁だけをケモノ扁に改めた「獐」が用いられるようになって、解放前まで踏襲された。解放後自治区建設のさい、チワン族に対する侮辱、蔑視をあらわすこの文字は「獐」に改められたが、64年に周恩来の指示でこんどは強壯を表わす「壯」の字に改められ、これが現在チワン族を表わす正式の漢字となっている<sup>(8)</sup>。

## 1.2 チワン族の人口・分布地域

チワン族は人口約1209万人(1978年の調査による)、中国の少数民族中最大の民族集団である。そのうち90%以上の1160万4400人が広西チワン族自治区(とくに河池、百色、南寧、柳州など左江、右江、紅水河沿岸一帯)に居住するほか、雲南省文山チワン族ミャオ族自治州を中心とした雲南に約82万人、広東省連山チワン族ヤオ族自治県等に約3万5千人。貴州省従江県等に約2万人が住む。またこのほか湖南省の江華ヤオ族自治県にも4千人余りが分散して住んでいる<sup>(9)</sup>。

## 2. チワン語

### 2.1 系 統

チワン語は、中国の言語学の用語では「漢蔵語系壮侗語族壮傣語支」に属する語である。シナ・チベット語族チワン・トン語派チワン・タイ語群の一言語というわけである。ブイ(布依)語、タイ(傣)語と同じ語群(group)である。同じ語派にはトン・スイ語派(侗水語支: トン(侗)語、ムーナム(老)語、スイ(水)語、モーナン(毛難)語)、リー語派(黎語支)がある。

余談になるが、この言語の権威である李方桂(Li Fangkuei)は、チワン・タイ語派といわず、カム・タイ語派(the Kam-Tai branch)といういい方をしている<sup>(10)</sup>。kamとは中国語でいう侗(Dong [tuŋ])語のことであり、中国語風にこれをいいかえれば「侗傣語族」(トン・タイ語派)ということになる。中国でも解放後の少数民族語の分類研究の出発点となった羅常培・傅懋勳論文<sup>(11)</sup>では「侗傣(又は黔台)語族」と書かれている。しかし現在ではどの論文でも「壮傣語族」というようになっている<sup>(12)</sup>。

### 2.2 方 言 <sup>(13)</sup>

チワン語は大きく次の2つの方言圏に分かれる。

- (1) 北部方言: 東は広西チワン族自治区の龍勝、永福、陽朔、貴県、横県、南は南寧、平果、田陽、雲南省の富寧、広南、邱北、西は雲南省師走、北は貴州省との省界を結んだ線内の広大な地域。内

部はさらに7つの土語に分けられる。

- (2) 南部方言：東は横県と欽州を結ぶ線、北は邑寧、南寧の南、隆安、徳保、那坡、広南の南、硯山を結んだ線、西は雲南省文山チワン族ミャオ族自治州、南はヴェトナムとの国境線に囲まれた地帯。内部はさらに5つの土語に分けられる。

北部方言を使用する者は人口の70%、南部方言を話す者が30%である<sup>(14)</sup>。北部方言はこのような人口も多く、分布地域も広いが、各土語間にそれほど分岐はなく、また土語内部での差異も少ない。これに対し南部方言の内部差はかなり大きい。

南北両方言の差は主として語音の違いにもとづく。ついで語彙の差が大きく、文法の差はほとんどない。語音の違いの例を一、二挙げておくと、例えば、北部には有気音の声母（語頭の子音→後述）がないのに南部にはある（北部[k] [t]：南部[kʰ] [tʰ]のような対応がある）。北部の[f] [p]は南部では[m] [v]にそれぞれ発音される。語彙で《月》は北部では dw:n<sup>1</sup>、南部では ha:i<sup>1</sup>、《汗》を北部では thw<sup>5</sup>、南部では ha:n<sup>6</sup>という、といった違いがある。

### 2.3 チワン語の概略

行論の便のために、チワン語の主な特徴を簡単に紹介しておく。語音は北部方言地区の広西武鳴地方（このチワン語が標準音とされる）の音声による。

#### 2.3.1 語音 (15)

##### 2.3.1.1 チワン語の音節

チワン語の音節は漢語に似て、声母（initial：音節初頭の子音）＋主母音（vowel）＋韻尾（ending）、それに声調（tone：音節全体にかぶさる音調）という形で構成され、これを IVE/T という一般式で表わすることができる。例えば、形容詞 sa:ŋ<sup>1</sup> 《高い》において、/s/ は声母、/a:/ は主母音、/ŋ/ は韻尾、最後の数字が声調だというふうなわけである。このうち声母と声調を除く要素、つまり主母音と韻尾を合わせた VE を韻母という。以下、チワン語の声母、韻母、声調を一瞥しておく。

##### 2.3.1.2 声母

チワン語の標準音には全部で22の声母がある。

|   |       |   |      |   |   |    |       |
|---|-------|---|------|---|---|----|-------|
| p | b[ʔb] | m | f    | v |   | pj | mj    |
| t | d[ʔd] | n | s[θ] |   | l | r  |       |
| k |       | ŋ | h    |   |   | kj | kw ɲw |
|   |       | ɲ | ɛ    | j |   |    |       |

無声閉鎖音 p, t, k, pj, kj 等は南部方言では有気、無気の2つに分かれる。また口蓋化声母の pj, mj は武鳴では [pl] [ml] のように発音される。kj が [kl] と発音される地方もある。このように複子音の声母と [ʔb] [ʔd] のような声門閉鎖音の声母をもつことがチワン語語音の一つの特

徴である。

2.3.1.3 韻母

チワン語には、a, e [ɛ]i, o [ɔ]u, w の6つの基本母音がある<sup>(16)</sup>。またこのほかに漢語からの借用語にしかあらわれない [ə] がある。 ([ə] はもともと固有のチワン語としては、ごく一部の地方にしかなかったものだが、最近では漢語語彙の借用にともなって各地のチワン語に定着している)。

この6つの基本母音には、e 以外はすべて長音と短音の別がある。(e は ei が短音である以外はすべて長音に発音される)。また、基本母音が単独で韻母となるばあいには、その母音はすべて長音になる。例えば、na<sup>2</sup> [na:] 《畑》がそうである。

韻尾には、母音 i, u, w を韻尾とするもの (例えば、dei 《よい》、hau<sup>4</sup> 《米》など) と、m, n, ŋ, および p, t, k を韻尾とするもの (例えば ham<sup>3</sup> 《少し》、huŋ<sup>1</sup> 《大きい》、lok<sup>8</sup> 《六》など) とがある。後者の子音韻尾の前の母音は e 以外はみな長音、短音の2つに分かれる (例えば、a:m/am, i:p/ip, o:t/ot のように)。

2.3.1.4 声調

シナ・チベット語族諸言語の大きな特徴の一つに、声調 (tone) の存在がある。声調は前述したように、音節全体にかぶさる音調のことであるが、チワン語には、この声調が8つある。

この8つの声調は、-p, -t, -k のような閉鎖音韻尾をもつ音節にあらわれる2つの促声調 (短かく、つまる声調。伝統的な漢語音韻学でいう「入声」) と、それ以外の音節にあらわれる6つの舒声調 (促声調以外のもの。伝統的な音韻学用語でいえば、「平声、上声、去声」である) の2種に分かれる。これはちょうど漢語の平、上、去、入の四声がそれぞれ陰 (歴史的にみて声母が清音だったもの) と陽 (歴史的にみて声母が濁音だったもの) との2類に分かれ、全部で8つの声調であった (広東語はいまでもこの体系を残している) のと相応しているといえる。いまこれを図示すれば表の通りである。

(17)

| 声 調         |       | 調 値   | 例                 |                     | 漢語調類  |
|-------------|-------|-------|-------------------|---------------------|-------|
| 舒<br>声<br>調 | 1     | ˩ 24  | na <sup>1</sup>   | 《 厚い 》              | 陰 平 声 |
|             | 2     | ˨˨ 31 | na <sup>2</sup>   | 《 畑 》               | 陽 平 声 |
|             | 3     | ˨˨ 55 | na <sup>3</sup>   | 《 顔 》               | 陰 上 声 |
|             | 4     | ˨˨ 42 | na <sup>4</sup>   | 《 母の姉妹のおば 》         | 陽 上 声 |
|             | 5     | ˩ 35  | na <sup>5</sup>   | 《 矢 》               | 陰 去 声 |
|             | 6     | ˩ 33  | no <sup>6</sup>   | 《 肉 》               | 陽 去 声 |
| 促<br>声<br>調 | 7 { 短 | ˩ 55  | nap <sup>7</sup>  | 《 さしこむ 》            | 陰 入 声 |
|             | 8 { 長 | ˩ 35  | na:p              | 《 脇にはさむ 》           |       |
|             | 8 { 短 | ˩ 33  | nap <sup>8</sup>  | 《 策 <sup>たば</sup> 》 | 陽 入 声 |
|             | 8 { 長 | ˩ 33  | na:p <sup>8</sup> | 《 (物、税を) 納める 》      |       |

• 声調、調値ともに標準音 (武鳴音) のものである。

## 2.3.2 文 法

### 2.3.2.1 品 詞

チワン語の単語は、名詞、量詞、代名詞、動詞、形容詞、指示詞、数詞、副詞、接続詞、介詞（前置詞）、助詞、語気詞、声貌詞（擬声語）の13品詞に分けられる。このうち名詞、量詞、代名詞を「体詞」という。体詞は主語または客語（目的語）になり、副詞の修飾を受けない。動詞、形容詞は「謂詞」といい、述語となり、副詞に修飾される。以下、簡単に各品詞の文法的特徴について説明しておく。

### 2.3.2.2 名 詞

名詞、代名詞には、格変化、性、数を表わす語法成分はない。格の関係は語順によって示される。例えば、

kai<sup>5</sup> 《鶏（ガ）》 han<sup>1</sup> 《鳴く》 （述語の前→主格）

dam<sup>1</sup> 《植える》 pjak<sup>7</sup> 《野菜（ヲ）》 （述語の後→目的格）

no<sup>6</sup> 《肉》 mou<sup>1</sup> 《豚（ノ）》 （名詞の後→属格）

### 2.3.2.3 量 詞

漢語では、例えば細長い形状をした事物を数えるとき「条」[t'iau]という単語を数詞と名詞の間に置いて、「一条蛇」《一匹のへび》、「三条河」《三本の川》、「四条繩子」《四本のひも》のように表現する。このばあい「条」は事物の数量単位を表わす機能をもっと同時に、事物をその形態（形状）に即して類別するという機能をもつ。漢語文法では数量単位であることに着目して、これを量詞とよんでいるが、類別機能に着目して類別詞ということもある。

量詞（類別詞）はシナ・チベット族諸語の特徴をなす語法範疇である。ただシナ・チベット語族でも、チベット語のようにほとんど量詞のないもの、チンプォ（景頗）語のように非常に少ないものといろいろある。チワン語は量詞の豊富な言語の一つである。例、

ha<sup>3</sup> 《五》 tu<sup>2</sup>（量詞）mou<sup>1</sup>《豚》→《五匹の豚》

fa:k<sup>8</sup>（量詞）mit<sup>8</sup>《刀》 nei<sup>4</sup>《この》→《この刀》

### 2.3.2.4 動 詞

動詞には活用変化はなく、そのままの形で用いる。客語（目的語）をとるときは、

kwn<sup>1</sup> 《たべる》 hau<sup>4</sup> 《ごはん》→《ごはんをたべる》

mi<sup>2</sup> 《もっている》 saw<sup>1</sup>《本》→《本をもっている》

のように動詞の後ろにおくことで表わす。

体 (aspect) は、時態助詞や副詞を使って表わす。例えば過去は kva<sup>5</sup> を、現在進行中の動作は twk<sup>7</sup> を、完了した動作は dai<sup>3</sup> をそれぞれ動詞の後ろにつけて表わす。あるいは、近い未来（<<

もうすぐ〜しそうだ≫)は jak<sup>7</sup> を動詞の前において表わすなどがその例である。

動詞にはまた、願望、可能などを表わす、man<sup>2</sup> 《〜できる》、ni:n<sup>6</sup> 《〜したい》や、判断動詞 twk<sup>8</sup> 《〜である》などがある。

#### 2.3.2.5 形容詞

形容詞にも活用はない。チワン語の修飾・被修飾の関係は日本語や漢語などと違って「被修飾語＋修飾語」の順になる。従って、例えば《赤い花》は、

va<sup>1</sup> 《花》 di:n<sup>1</sup> 《赤い》

の語順で表わされるが、これは同時に《花は赤い》という形容詞文にもなりうる。そのいずれであるかは文脈で判断するほかはない。

形容詞はまた、dei<sup>1</sup> dei<sup>1</sup> 《とってもよい》(dei<sup>1</sup>は《よい》の意)のようにそれを重ねることによって強調を表わすし、ham<sup>5</sup> 《やや》、kik<sup>8</sup> 《非常に》のような副詞を前に加えることによって程度を表わす。比較級、最上級のごときものはない。

#### 2.3.2.6 数詞

数詞は十進法で漢語と同じ表現法である。deu<sup>1</sup>, he<sup>1</sup>, nw:n<sup>6</sup> 《一》、soin<sup>1</sup> 《二》、ha<sup>3</sup> 《五》などを除いては、漢語と同源の数詞を用いる。序数詞は ta:i<sup>6</sup> 《第》を数詞の前につけて表わす。

#### 2.3.2.7 主な語順

以上の叙述でもふれたように、チワン語の文法的関係は、格や数や時といった語法範疇によってではなく、基本的に、語順と助辞によって表わされる。主な語順は次の通りである。

- (1) 主語＋述語
- (2) 主語＋述語＋目的語
- (3) 主語＋述語＋補語
- (4) 主語＋述語＋目的語＋補語
- (5) 被修飾語＋修飾語
- (6) 副詞は述語の後にくる(ただし一部の副詞は例外的に逆になることもある)

### 3. チワン語に対する漢語の影響 (19)

#### 3.1 前提

チワン語に対する漢語の影響を論じようとすれば、その前に最低二つのことをはっきりさせておかなければならない。

一つはその漢語がどういう漢語かということがある。周知のように漢語は、北方方言(官話方言、いわゆる Mandarin)、呉(江蘇、浙江)方言、粵(広東)方言、閩(福建)方言、客家語の5つに大別され

る。このうち使用区域、使用人口ともに最大のものが北方方言であるが、これはさらに華北（北京、瀋陽、済南などの）方言、下江（南京、揚州など揚子江下流の）方言、西北（西安、蘭州などの）方言、西南（漢口、成都、昆明など西南の）方言に分けるのがふつうである。チワン族の分布地域でおこなわれる漢語は、このうちの西南方言と粵方言である。広西北部と雲南では西南方言が、広西南部と広東では奥方言が通用しているのである。（しかし、粵方言地区でも現在では西南方言が通用する）。従って小稿で漢語という場合には、それは標準語たる普通話ではなく、粵方言か西南方言のことである。

もう一つは、その漢語がいつ頃の時代の漢語かということである。チワン族と漢族の接触は、秦漢時代に始まるといわれる<sup>(20)</sup>。この2千年余の接触、往来の過程で、チワン語は多くの語彙を漢語から吸収してきた。しかし、政治、経済、文化のあらゆる面で接触が急激に増大したのはやはり近代以降、とりわけ解放後のことである。小稿の拠った資料は、これを基準にして、解放前にチワン語に入りこみ、すでにその一部になっているような漢語語彙を古借用語（老借詞）、解放後に借用されたものを新借用語（新借詞）（新しい借用語）として区別している。小稿も以下の叙述でこの語を用いるが、それはさておき、ここでの叙述の対象となる漢語とはこの新借用語の方である。

### 3.2 音声面への影響

チワン語音声における漢語の影響は、古借用語の時代には、あまり認められない。影響がはつきりしてくるのは、新借用語が吸収されるようになってからである。

まず、各地に普遍的にみられるのが、音の増加である。増加した音声には、 $a$ ,  $l$ ,  $\eta$ ,  $y$  などの母音、および介音  $i$  をもつ口蓋化した声母  $sj$ ,  $tj$ ,  $lj$ ,  $kj$  などがある。

$a$  はもともと柳州土語の一部の地区の固有語、 $se^1$  《水がきれいだ》、 $de^1$  《中》などの語にのみみられたものである。ところが、漢語語彙の借用の結果、ほとんどの地区で観察されるようになった。例えば、 $ka^2$ （「革命」の革  $ka$ ）、 $ta^2$ （「道德」の德  $ta$ ）など。

$l$  はチワン語ではもともと  $w$  と発音され、 $\eta$  と  $y$  は  $i$  と発音されていたものであるが、最近は多くの地方で、この音が観察されるようになった。例えば、柳州土語の「自治区」の発音  $si^4 si^4 ky^5$  はその例である。

$sj$ ,  $tj$  の例としては、龍州の  $sjau^5$ （「小学」の小  $\phi iau$ ）、 $tjau^3$ （「調査」の調  $tiau$ ）などがあげられる。

また、チワン語には、南方方言（例えば広南）を除いて、北部には、声母の有気音・無気音の対立がない。しかし、北部でも柳州・宜山一帯（この一帯は漢族がかなり多い）の一部の人は次第に借用語中の有気音と無気音の声母を使い分けるようになっている。

### 3.3 語彙への影響

広西民族出版社刊『チワン語・漢語語彙』（筆者未見）は、各地のチワン語の方言や土語を比較研

究し、流通性の大きい語彙を「推薦語」として、通用度の余り大きくない方言語彙と区別して収録しているという<sup>(21)</sup>。ここに、標準語として推薦された7906語の調査結果によれば、このうち1964語（全体の24%）が古借用語であった。また、ここで推薦されている常用の新借用語は全部で1019語（実際に使用されている新借用語はこれよりずっと多い）新旧の借用語を合計すると、チワン語の推薦語（標準語）の38%にもなったという。

その内訳をみると、古借用語の大部分は日常生活用語であり、そのうち名詞は、ほとんどが衣食住・農業生産などに関する漢族地区からきた事物の名称・動植物・鉱物等の名称・旁系親属の名称・文化・風習の名称などであって、抽象概念を表わす名詞（例えば「恩情」、「道理」、「利益」、「感情」など）は少ない。新借用語の名詞は、政治、経済、工農業生産技術、文教衛生・イデオロギーなどの面の新語、専門用語が大多数を占め、抽象的な事物を表わす名詞（「問題」「思想」「原則」などといった語彙）組織名、職業、職務名などを含む。日常生活用語は新借用語の中には少ない。その他の品詞も同じで、日常生活における具体的な行為、動作を表わす動詞、性質を表わす形容詞、量詞などはすべて、固有語によって表現される。このことは、チワン語に限らず一般に漢族文化の影響下にある少数民族語に共通していえることである。

次に音節構成からみると、古借用語と固有語は単音節が多く、新借用語は複音節が多いが、その中でも特に、2音節語が多い。これは漢語の発展の方向と一致している。ここに、1960年2月14日の『壮文報』（チワン文字の新聞）に掲載された政治論文（全文247語）の語彙調査の結果がある（表参照）。これによって、借用語の音節構成の一斑をうかがうことができるだろう。

|            | 総数   | 民族語 |      | 古借用語 |      | 新借用語 |      |
|------------|------|-----|------|------|------|------|------|
|            |      | 個数  | %    | 個数   | %    | 個数   | %    |
| 語数         | 247  | 96  | 34.8 | 61   | 24.7 | 100  | 40.5 |
| 音節数        | 348  | 94  | 26.7 | 68   | 19.8 | 186  | 53.5 |
| 一語当りの平均音節数 | 1.41 | 1.1 |      | 1.1  |      | 1.9  |      |

解放前のチワン語が、漢語語彙を借用する場合、 $\text{cap}^8\text{liŋ}^2$ （雜穀 *tsaliŋ* <<雜穀>>）のように、一語全部を音訳で吸収する以外に

$\text{p}^7\text{ak}^7$  《野菜》  $\text{po}^6\text{eai}^6$ （莠菜 *pots'ai* <<ホーレン草>>）→《ホーレン草》

のように、音訳借用語に固有語を加えたものなど、何種類かの吸収方法があった。これらのうち全部音訳というものが一番多く、その他の固有語の要素をもつ語においても、固有語の語素は次第に消滅していく傾向がある。

さて、漢語から次々と語彙が吸収されていくと、意味を同じくする借用語と固有語、新借用語と古借用語の併存という状況が生れる。新借用語と古借用語の場合は、新が旧を淘汰するのが普通である。では、借用語と固有語の場合はどうだろうか。次の3つのケースが考えられる。

第1は、意味の上で固有語と借用語が分業するケースである。例えば、《(液体の中から)すくい取る、すくいあげる》を意味する語は、チワン語では  $son^2$ 、借用語は  $lau^2$  (撈  $lau$  << すくい取る、魚をとる >>) であるが、チワン語の中では

$son^3$  → 《魚をとる》

$lau^2$  → 《(スープや水の中から)物をすくい取る》

の意に限って使われる。また、《煮る》には  $tum^5$  という固有語と  $\epsilon aw^3$  (煮  $t\dot{u}$ ) という借用語があるが、

$tum^5$  → 《(さつまいもとか、肉のかたまりのようなものを)まるごと煮る》

$\epsilon aw^3$  → 《ごはんを炊く、おかずを煮る》

のように何を煮るかによって使いわけるのである。

第2は、固有語は固有語と結びつき、借用語は借用語と結びつくというふうに、用語上区別して用いられるケースである。例えば、《歌う》には  $eu^1$  という固有語と、 $\epsilon i\eta^5$  (唔  $ts'a\eta$ ) という借用語が併存している。チワン族の民謡「山歌」[ $\dot{s}ank\dot{y}$ ]を表わす固有語は  $fwn^1$  借用語は  $san^6 ko^6$  であるが、《山歌を歌う》という場合は、 $eu^1 fwn^1$  とか  $\epsilon i\eta^5 san^6 ko^6$  としかいわず、 $eu^1 san^6 ko^6$  とか  $\epsilon i\eta^5 fun^1$  とかはいわない。つまり固有語の動詞はその目的語も固有語を選び、借用語の動詞は借用語の名詞としか結びつかないケースである。

第3は、意味も用法も同じである場合だが、このような例は多くない。例えば、《台所》の意味の固有語  $pak^7 \epsilon au^5$  と借用語  $\epsilon i^2 fan^2$  (厨房  $ts'ufan$ ) などがそうである。

しかし、全体的にみれば、固有語と借用語が併存している場合、たとえその固有語がかなり広範囲に使われている場合でも、借用語が固有語にとって代るというのが動かしがたい趨勢のようである。例えば、《道路》は固有語の  $ron^1$  がすたれ、借用語  $lo^6$  (路  $lu$ ) が、《赤い》は  $di\eta^1$  が衰退し、 $hon^2$  (紅  $hug$ ) がそれぞれ普通になっていきつつある。

また、チワン語の中に、それに相当する語句の存在しないような概念については、たとえその一部の意を表わす語が固有語中に存在していても、やはり漢語をまるごと吸収するのが普通である。例えば、《青年》を表わす語には

固有語 →  $pou^4 \epsilon o^2$  (《青年》というより《若い人》に近い語のようだ)

借用語 →  $\epsilon i\eta^6 nen^2$  (青年  $\eta^6 ignieh$ )

があるが、「青年運動」という場合には、決して  $pou^4 \epsilon o^2 jin^5 tun^5$  ( $jin^5 tun^5$  は「運動」 $yn tun$  の

借用語)とはいわないのである。特に、政治運動のスローガンや政策上のスローガンなどは、仮に固有語に訳せても、そうしないで、直接漢語を音訳するのが普通である。

### 3.4 文法への影響

漢語がチワン語の文法に与えた影響の主なものは、語順の変化、虚詞の吸収による新しい文法形式の出現と表現の厳密化などであるが、与えられた紙幅が尽きたので、ここでは語順の変化についてのみみておく。

すでにみたように(2.3.2.7参照)チワン語では、①名詞、形容詞が他の名詞を修飾する場合は「被修飾名詞+修飾語」の形になる。②副詞や形容詞が連用修飾語になる場合はそれが修飾語の後にくる。③動詞が目的語と補語とを同時にとる場合は、「動詞+目的語+補語という形になる、というのが固有語の順序であった。これらの順序は、漢語の影響ですべて次のように漢語型に変化した。(下線の語は借用語)

| 固有語の順序                                                                                             | 漢語の影響で新しく生れた順序                                                                       |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| ① paŋ diŋ 《赤い布》<br>布 赤い                                                                            | <u>hoŋ</u> <sup>2</sup> <u>ki</u> <sup>2</sup> 《赤い旗》<br>赤い 旗                         |
| saw <sup>1</sup> kou <sup>1</sup> 《私の本》<br>本 私                                                     | kou <sup>1</sup> <u>ti</u> <sup>6</sup> saw <sup>1</sup><br>私 の 本                    |
| an <sup>1</sup> ɛip <sup>8</sup> ɔk <sup>7</sup> 《第16個》<br>個 十六                                    | <u>tai</u> <sup>6</sup> ɛip <sup>8</sup> ɔk <sup>7</sup> an <sup>1</sup><br>第 十六 個   |
| ② fai <sup>4</sup> saŋ <sup>6</sup> lai <sup>1</sup> 《本はとても高い》<br>木 高い とても                         | fai <sup>4</sup> hwn <sup>3</sup> saŋ <sup>6</sup><br>木 とても 高い                       |
| ɔau <sup>2</sup> ku <sup>6</sup> kon <sup>6</sup> 《我々が先にやる》<br>我々 する 先に                            | ɔau <sup>2</sup> sin <sup>1</sup> ku <sup>6</sup><br>我々 先に する                        |
| ③ dam <sup>1</sup> na <sup>2</sup> liu <sup>4</sup> lo <sup>6</sup> 《畑をたがやし終えた》<br>植える 畑 おわる 完了の助詞 | dam <sup>1</sup> liu <sup>4</sup> na <sup>2</sup> lo <sup>6</sup><br>植える おわる 畑 完了の助詞 |
| ka <sup>3</sup> mou <sup>1</sup> tai <sup>1</sup> lo <sup>6</sup> 《豚を殺した》<br>殺す 豚 死ぬ 完了の助詞         | ka <sup>3</sup> tai <sup>1</sup> mou <sup>1</sup> lo <sup>6</sup><br>殺す 死ぬ 豚 完了の助詞   |

③は、漢語で書くと、固有語が「种田完了」、「殺猪死了」。新しい語順は「种完田了」、「殺死猪了」である。

#### 4. お わ り に

以上、チワン語に対する漢語の影響を音声、語彙、文法の各面について簡単にみてきた。

そこで明らかになったのは、漢語のチワン語に対する圧倒的な言語的侵略一言語干渉の実態であるといつてよからう。人口や経済、文化的に優位な民族の言語が、それに劣る隣接の民族の言語を侵略するのはよく知られた言語事実である。漢語のチワン語に対する干渉の巨大さも、結局は漢民族のチワン族に対する人口、経済、文化などの各面における歴史的な優位性に由来するものであることはいうまでもない。しかし、漢語のチワン語（に限らず周辺少数民族言語すべてにあてはまることだが）に対する干渉には、もう一つ別な＜言語理論＞という抽象的な要素が、干渉を促進する要素として働いているような気がする。以下それについて考えの概略を述べ、まとめに代えたい。

解放後の中国の言語政策に大きな影響を与えたものにスターリンの「言語融合による単一の民族共通語形成の理論」とでもいうべきものがある。それは、全世界の社会主義化実現後の遠い将来、世界の諸民族語はまずいくつかの単一の地帯的言語へと統一され、やがてそれが一つの共通の国際語へと融合するという壮大な仮説であるが、この仮説が、中国の言語学者や政策家たちの少数民族語観に歪みを与えたのではないかと思うのである。<sup>(22)</sup> 50—60年代に発表された少数民族諸語の紹介や研究論文を読むと、ほとんど例外なく漢語借用語の増大や漢語的な表現の増大、漢語の干渉に高い肯定的評価を与えていることがわかる。その背後には言語学者たちの「単一の地帯的言語」に漢語を擬し、それに統一さるべき諸民族語に少数民族諸語を擬すという発想、いいかえれば、漢語の干渉→少数民族諸語の解体→漢語を中心とする「地帯的言語」の形成＝言語の進歩という発想が横たわっていること疑いない。こういう発想のもとでは、少数民族語の漢語に対する独自性の主張とか、漢語の影響を＜言語汚染＞ととらえる考えは出てこない。漢語の無制限な侵入こそ歓迎されることになる。スターリン理論が漢語の干渉を促す要素として機能したという考えは十分に成立するわけである。ただ、こういう発想は四人組打倒後、とりわけ80年1月の第三回全国民族科学討論会以降は清算されつつあり、事態は少数民族語の独自性を尊重する方向にすすみつつある。こうした事態とそのもとでの漢語の影響については稿を改めて論じたい。

#### 注

- (1) 邦語文献でやや詳しくチワン語を扱ったものとしては、ゲ・ベ・セルヂウチェンコ、橋本万太郎訳「中華人民共和国における僥僳諸語の研究」『中国語学』1961年3号（108号）7—12頁があるが、これも概説的紹介にすぎない。
- (2) 林耀華「新中国の民族学研究と展望」『民族研究』1981年2期48—55頁。
- (3) 李有義「我国民族学的回顧と展望」『民族研究』1980年1期48—59頁によれば国内の少数民族から認知を要求され、識別を待っているものが23種、不詳のものが32種あるという。

- (4) 韋慶穩、覃国生編著『壮語簡誌』民族出版社1980年7月刊の「概況」の項による。
- (5) 广西壮族自治区民族事務委員会編『今日の广西少数民族』广西人民出版社1978年9月刊16頁。
- (6) 注(4)に同じ。
- (7) 范宏貴、唐兆民「壮族族称的緣起和演变」『民族研究』1980年5期40—44頁。
- (8) 注(4)、(5)、(7)による。
- (9) 国家民族委員会編写組『中国少数民族』人民出版社1981年5月刊「壮族」の項495—508頁による。
- (10) Fang-kuei Li, 'Language And Dialects of China', Journal of chinese Lingestics, Vol.1 No.1 1973, pp 1-12、小川環樹「中国における諸民族の言語と方言」と題した邦訳がある。『中国語学研究』創文社1977年3月刊275—295頁所収。
- (11) 羅常、傅懋勣「国内少数民族語言文字的概況」『中国語文』1954年3月号21—26頁、のち中華書局54年12月刊の同名の書29—45頁に収録。
- (12) 最新の研究成果をとり入れたと思われる『辞海(修訂本)』「語言文字分冊」上海辞書出版社1978年4月刊の「壮侗語族」の項(62—63頁)には「也称“黔台語族”或“侗台語族”」とある。
- (13) この項は主として注(4)の書「方言」の項(78—96頁)に拠った。
- (14) 中国科学院少数民族語言研究所僮語小組「僮語概況」『中国語文』1961年10、11月合併号74頁。
- (15) この項は主として注(4)の書「語音」の項(3—20頁)に拠った。
- (16) 「僮語概況」(注14)ではㄅを入れて全部で7つの基本母音があるとする。
- (17) 注(4)9頁の表をそのまま用いた。
- (18) この項は主として注(4)の書「語法」の項(30—77頁)に拠った。
- (19) この項は主として中国科学院民族研究所少数民族語言研究組僮語小組(執筆人・王均)「僮語中的漢語借詞」『中国語文』1962年6月号251—264頁によった。チワン語に対する漢語の影響はこの論文にはば論じ尽されている。
- (20) 本書編写組『壮族簡史』广西人民出版社1980年3月刊7頁。
- (21) 王均(注19)論文。以下この項の資料はすべて同論文による。
- (22) 詳しくはスターリン「同志ア・ホロボフへ」『弁証法的唯物論と史的唯物論』国民文庫版190—197頁など参照。